



TITLE:

企業間競争と技術進化－日本のルームエアコン産業の事例研究－(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

中原, 久美子

CITATION:

中原, 久美子. 企業間競争と技術進化－日本のルームエアコン産業の事例研究－. 京都大学, 2015, 博士(経済学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18761>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士（経済学）	氏名	中原 久美子
論文題目	企業間競争と技術進化 ー日本のルームエアコン産業の実証研究ー		
(論文内容の要旨)			
<p>企業行動とイノベーション・技術進化との関係性についての議論はこれまで多くの蓄積があるが、企業間競争の視点をより強調したより現実に即した関係性の把握が必要である。特にインクリメンタル・イノベーション（incremental innovation）を研究対象とする場合には、長期的なスパンでの観察が必要であるが、特定の産業を長期的に観察するタイプの研究は相対的に少ない。</p> <p>本論文ではこのような問題意識をもとに日本のルームエアコン産業を対象として3つの事例研究を行った。個別事例の観察から得られた知見で、企業間競争とイノベーション・技術進化との関係性についての全体像を説明することは難しいが、イノベーション・技術進化の内容やプロセス、メカニズムをより詳しく観察し検証することによって、これまで以上に企業間競争の意義や有用性、相互作用の存在が明らかになると考えた。</p> <p>第1章ではイノベーション・技術進化に関する先行研究の検討を行い、具体的なりサーチ・クエスチョンは第2章の「分析の焦点と方針」で示した。本稿で対象とするのは日本のルームエアコン（Room Air Conditioner：RAC）産業である。</p> <p>事例研究にあたる第3章は、「『ポーター仮説』と企業間競争」と題して、規制と企業行動、および規制と技術進化との関係性について検討した。規制が技術を促進するのか否かという問題意識から、規制、企業行動、技術進化について検討し、現実には企業間競争の影響が規制の影響力を左右する面があることを示した。</p> <p>続く第4章の事例研究では「ロードレース的技術進化のプロセス」と題して、企業間競争から新たなイノベーションや技術が生起し、それが産業レベルの技術進化につながっていくプロセスを示した。また企業間競争の背景にある一見見落とされがちな要因にも焦点を当て、それらの複合的な作用について説明を試みた。</p> <p>第5章の事例研究では、「技術評価の変化と技術の優位性の顕在化」と題して、Cattani（2005）、（2006）が提示した「技術的前適応」の概念が、既存産業の既存技術においても適用可能であることを示した。またこのプロセスによって、企業間競争の焦点やロジックが変更され、最終的には企業の競争優位性獲得の一つの要因になっていくことを説明した。第6章は「むすび」とし、本稿の要旨、インプリケーションおよび今後の課題を示した。</p> <p>本稿で得られた知見のうち、とりわけ強調したいのは、企業行動とイノベーションとの関係性についての議論において、企業間競争との複雑な相関関係を考慮することの重要性である。本稿で取り上げたいずれの事例においても、企業間競争の視点を加えること、および長期的なスパンで具体的かつ詳細に観察することによって、これまでの議論以上に、現実に即したイノベーションの発現プロセスやメカニズムをとらえることができることを示した。</p>			

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

この論文は、企業の技術進化・イノベーションを説明する上での、企業間行動がもたらした影響のメカニズムを探索したものである。企業間競争がイノベーションに与えた影響に関する研究にはかなりの蓄積があるが、この論文は、既存研究に対していくつかの新しいメカニズムを概念化して加えることをテーマに取り組んだ意欲的な研究である。

研究方法としては、事例研究を選択し、同質的でインクリメンタルなイノベーションが蓄積された特徴を持つ日本のルームエアコン産業において、3つの事例について分析・議論を進めている。事例の分析から、規制とイノベーションの関係における企業間競争の役割の指摘、企業間の技術進化がロードレース的構造で収斂していくこと、および環境の変化による技術の潜在的優位性の顕在化といった、企業間競争と技術進化に関係した興味深いメカニズムを説明している。具体的な事例をもとにしたメカニズムの解明には十分な学問的貢献があり、事例研究として価値のある研究になっている。

この研究の特に評価すべき点は二つある。第一に、第3章から第5章で展開された個別の事例研究で説明されたメカニズムが興味深く、かつオリジナルな概念化がなされていることである。上記の3つのメカニズムは、いずれも日本のルームエアコン産業という事例の特徴をうまく生かした概念化がなされており、しかもそのメカニズムの一般化可能性は産業や国の枠を越えて十分広がっているように思われる。その意味において、この論文の学術的貢献の潜在的可能性は高いといえよう。

第二に、事例研究を実施する上で、現場でのインタビューなどの一次データに加え、日本のエアコン産業を構成する各社の技報などの二次資料を丹念に収集して活用している点があげられる。40年間以上の長期にわたる技術関係の膨大な資料を収集していることによって、この論文が課題とした長期間にわたる企業間競争の影響が議論できており、そのデータ収集を徹底する姿勢は高く評価できるだろう。

このように、この論文は、技術経営研究の流れを押さえた上で、まだ十分検討されてこなかった領域のメカニズムを質的研究で解明していこうという、野心的な試みであるが、いくつか問題も残されている。

第一に、企業間競争と技術進化との関係に関する既存研究は整理されているものの、それと事例研究との関係がうまく説明されていないため、論文の学術的貢献が明確には記述できていない点である。各章の個別の事例研究の学術的貢献が比較的明確であるにもかかわらず、論文全体としては明確にできていないのはやや残念であった。それと関連するが、博士論文全体のリサーチ・クエスチョンとそれに対する答えが一貫していない点も問題である。個別の事例研究を貫く大きなクエスチョンがうまく立てられておらず、論文全体を統合する分析や議論が不明瞭なままとなっている。論文全体を貫くクエスチョンとそれに対する答えを明確にすることで、論文全体として既存研究に何を付加したのか明示できるように記述すべきであった。

第二に、ルームエアコン産業に特化して議論したことで、それ以外の産業との関係について明確にできていない点があげられる。このため、パッケージエアコンなどの隣接産業との相互作用をうまく記述できていない。加えて、この事例を一般的な文脈に位置付けたうえで、その境界条件を議論することもうまくできていないのは残念であった。

以上のような問題点はあるものの、これらは今後の課題というべきものであり、企業間競争と技術進化の関係について、興味深い事例を通じて明らかにしたこの論文の学術的価値を損なうものではない。よって本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成27年2月23日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。